

山田敬三著 『魯迅の世界』

永末, 嘉孝
長崎造船大学 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/9786>

出版情報 : 中国文学論集. 7, pp.55-67, 1978-06-20. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

山田敬三著

『魯迅の世界』

永末嘉孝

著者はつい近年まで九州大学で教鞭を執っていた。そして中国文学、とくに魯迅に関する研究論文を九州大学や京都大学の紀要をはじめ『野草』・『中国語』等の雑誌に次々と発表されていたので、文字通り新進気鋭の魯迅研究者として学会の注目をあびていた。

著者の九州大学時代、私は幾編かの論文をいただき、私なりにその克明な考証や論の重厚さに教えられていた。従って、今回一冊の大著としてまとめられたのを一種の興奮に駆られて読み通し、あらためて、その重みをかみしめている。いや、もっと卒直に言えば、魯迅研究者のすべてが「竹内魯迅」やその後の「丸山魯迅」に、あたかも大鬼の如くたちはだからられているはずだが、今また私の前には本書「山田魯迅」がたちはだかってきたのである。

本書には至る処に貴重な見解がきらめいているのだが、今回通読して特に強く感じさせられたのは、全編に流れている著者の誠実な研究態度・誠実な人柄である。

高邁な論理を展開する専門家でも、普段は持っていないも、時にふっと欠落させてしまう中国研究の視点、「日本から侵略されつつけた中国」「中国を侵略しつつけた日本」という視点を、著者は常に保持されており、心底脱帽させられる。著者の学問研究こそ、現代に密着した誠実な研究だと思ふのである。

さて、著者の学問研究の誠実さは、いつ植え付けられたのであろうか。著者の中国志向は十七才の少年時代に端を発している。「あとがき」にそれが実に素直に吐露されている。それはほぼ同世代の私の胸をことのはかうつものであった。しかし私は、私自身の読みの浅さから、うかつにも、これまでは、著者が竹内好氏に、再三の「ラブレター」で求愛し、ついには「私が日常生活で何らかの選択肢に直面したときに、たいていの場合は氏の影がちらついて私の判断に口ばしを入れようとした。これは私にとって実にはがまんのないことである。」竹内好こそ「積年の仮想敵」であり「永遠の仮想敵」なのだという著者の姿が読めていなかったのである。

十七才の少年は、林語堂の『北京好日』を読むが「日本の侵略に対する激しい告発」の真の意味は読みとれなかった。しかし、まも

なく竹内の『現代中国論』中の「中国のレジスタンス」に出会う。そこで「頭の中に血のさかまきような苦痛を覚え」と同時に、「私のまわりにいるおとなたちが、かつてこんな形で中国にかかわっていた」ことを知ったのである。(少年のころ、私自身も、おとなたちが村祭の宴席で、中国で如何に荒武者であったかを得々として語ったのが未だに耳に残っている。しかし、その恐ろしい意味はわかっていなかった。)

・竹内氏は同書で恥じている。

帝銀事件を数段抜きで毎日報道した新聞が日本国民の道德的責任が告発されている。麻薬事件を見送ったのは驚くべきことである。良心に痛いのでなく、痛く感ずる良心がないのだ。道德的不感症だ。麻薬事件を発生させたものが麻薬事件を見送らせている。してみれば、林語堂の告発は、今日の事実をもって立証されたわけであって、私は日本国民の一人として、それに抗弁するコトバがなくなるのであろうか。

かような竹内論文に目をひらかれた著者、その著者の眼前にこの竹内が「永遠の仮想敵」としてたちはだかるという。そこには反撥、超克を、挑めば挑むほど拜跪するよりない著者の姿がみえるが、私はそういう著者の姿に敬意を抱く。何を考え、何をするにも常に自分の前にたちはだかるものを持っていることこそ、そしてそれとの対決を避けないで進むことこそ、誠実さの証し以外の何物でもないからである。

「山田鲁迅」の根源をさぐるのに手間どってきたが、以下に、各部・各編を紹介、検討していこう。

二

本書『鲁迅の世界』は次のように三部と付録一編から構成されて

いる。

第一部「鲁迅の形成」は伝記的、作家論にあたるもので、本書のほぼ半分を占め、習作旧詩にスポットをあてた点で断然異彩を放つ「新世界への脱出」——修学時代——という好論文を含む五編の力作からなる。すなわち、

「文学と英雄の系譜(上)」——留学時代前期——

「文学と英雄の系譜(下)」——留学時代後期——

「新旧のはざま」——

「蹉跌から呐喊まで」——

である。

——役員時代——

第一部「鲁迅の文学」には造詣深い日本文学を武器とし、狩人の如き精悍さと執拗さをもって論及した「鲁迅と『白樺派』の作家たち」という大論文がある。その外、やはり読みごたえのある「屈原を葬る」——鲁迅のリアリズムとロマンティズム——、「火を盗む者」——鲁迅とマルクス主義文芸——の二編が収められている。

第二部「鲁迅の世界」はややエッセー風のもので「戦後日本の鲁迅論」「鲁迅と郭沫若」——その九州大学との関係——、「創作の筆をたつとき」——境界としての「三・一八」事件——、「鲁迅の世界」——「野草」の実存主義——が収められ、尚、付録として、「鲁迅旧詩『自題小像』の成立」という好論文が添えられている。

さて、以下に各論文の要旨、強く受けた感動、若干の疑問点を述べていこう。

第一部「鲁迅の形成」

「新世界への脱出」——修学時代——

冒頭のこの論文では、「魯迅文学の源泉の掘りおこ」しを試み、その方法として、「魯迅自身をして語らしめ」ようとする。更に、魯迅の回憶の洗いなおし、死角をなしていた習作旧詩の徹底的検討を行なっていく。それによって、家庭事情の急変がなければ、「せいせい旧体制の歯車の一つに収まっていたかもしれない」魯迅が、江南水師学堂にその出路を求めていく経緯を克明に再現したものである。本編中、すぐれたところ、共感を抱いたところは多々あるが、いまその一部を紹介してみよう。

1、旧世界の亡霊たちからの脱出をはかり、南京水師学堂に入ったはずの魯迅が、わずか半年で退学、県試を受験し合格、府試の受験資格を得ながら今度はすっぱかすという不可解な行動を、「知堂回想録」「魯迅の故家」「旧日記中の魯迅」等の資料から次のように解明する。

府試を受けるよりは水師学堂からの退学、陸師学堂への転学に魯迅の希望がよせられていたとみなしてよい、かえ玉までして母親が確保した院試受験資格を放棄したこともやはりその選択があるていど期待にかなっていたことを証明するもの、いうなれば県試受験は、家族の要望に対する申しわけいど……（十七頁）

魯迅が一切ふれていないのだから、妥当なところだろうと思いつながらも、後に「孔乙己」や「白光」などの「科挙もの」を書いているのだから、まだ何かありそうなもの、著者はいささか軽く流しすぎていると感じていた。ところが、この思いは、続く「別諸弟三首」「蓮蓬人」「祭書神文」の分析で美事にくつがえされた。

留学以前の魯迅は屈原を「憂国の人士」「憂国詩人」という積極面において認定するのではなくて、むしろ隱遁の孤高に本来の姿をとらえようとする。（二二頁）と見做し、だから「離騷」を典拠とする「蓮蓬人」を生んだとし、そこに「故郷を離れて、異端の「新学」に身を処していた作者の想い」、魯迅の苦衷を読みとっていたのである。

2、「祭書神文」にも同様に、旧世界の亡霊たちとのしがらみに苦悶している魯迅の姿を読みとるのである。賈島の故事にならってたわむれている魯迅、文章への志旺盛でありながら現実には実学の徒であり、旧制度の登龍門とは距離をたもっている魯迅、この矛盾を著者は次のように説明する。

しかし、その矛盾をあえてひきおこしたのは彼自身の意志にもとずく行為の結果にはかならない。詩ははしくも自己分裂の苦悩を顕示した。詠志に騷体を用いたこと、詩中に「離騷」を引いたことも、もちろん、この苦悩と無関係とはいえない。（二七頁）

3、旧詩「杜の神を送る」では、魯迅の民間風俗への強い関心、「親しい情感の吐露」をみている。そして晩年の「杜の神を送る日の漫筆」や「朝花夕拾」の「五猖会」「無常」「後記」にも説き及び、そこに思考の連続性をみている。また民国前夜の「破悪声論」にも同様の連続性をみるのである。

村祭りを始めとする土俗信仰を、一年の労働に倦んだ「樸素の民」の「精神の解放」とみなす考え方であり、いま一つは「西歐の文学芸術」も、神話から多くの影響を受けて始めて「莊嚴・美妙」たり得た……「庚子送灶即事」一首には、後の魯迅のこうした思考と一脈かよいあうものが、きわめて素樸な形態でよみこま

れている。(三二頁)

4、『別諸弟』三首には一九〇〇年のものと一九〇一年のものがあるわけだが、後のそれに著者は莊子的な世界へのあこがれ、ないしは夢があったと指摘し、ここに詠われた船旅の道中と『野草』の「編『好的故事』」とは密接なつながりがあるという重要な指摘をするのである。

5、更にダメ押しのように、旧詩の極致を示すという作品、『惜花四律』にふれ、その詩語の「目くらむほどの彩色が施されている」ことや「詩中に小説的題材を多くとりこんでいる」ことなどから「後の魯迅に屈折して接続するものを見」ている。

「花書」を買ひあさり、「花譜」をたんねんにしき写した少年、色彩感覚ゆたかな旧詩の制作にうちこみ、それに小説的素材をふんだんにぶちこんだ青年周樹人、それは後に仙台医学専門学校で藤野先生の「解剖図」を「美術」的に変型した医学生、版画提唱者としての晩年の魯迅、小説作者、小説史研究者としての魯迅である。(四〇頁一四一頁)

6、著者は、従来切り捨てられていた習作旧詩に執拗にとりくんだだけに、その意義を自信に満ちて説明する。

わずか十数首の習作ではあってもそれらは今日うかがい得る魯迅文学修業初期の成果であり、いかなれば魯迅文学の原型がそこには秘められている。とりわけ最後の『惜花四律』には、諷諭一色に塗りこめられた晩年の旧詩からはとうていいかい間みることのできない世界が構築されていた。それは作者自身が「散文詩」と称した『野草』の旋律にいちばん近い響きをもつ魯迅美学の結晶である。かさかさした散文のように彼の名づけた「雑感」文の

底部にも、しばしば無限の詩想はきらめいていたけれども、それとまったく同質の光沢が、これらの詩中には見られる。(四二頁)

「文学と英雄の系譜(上)」——留学時代前期——

辛亥革命の前夜、一九〇二年四月、魯迅は「新世界への脱出」を求めて日本に留学、時に日本は革命の寒屋裏であり、魯迅は「好むと好まざるにかかわらず、その身を革命のルツボに投げこんでい」くのである。

著者はこの留学時代を仙台医専退学を境に、前期・後期に区分する。そして中国の現実に着しながら苦惱しつつ、そこから「豪俠の士」を願ひ「精神界の戰士」を想ひ「英明の士」「一二の士」と刻々と新しい英雄像を描き、その認識を深めていく魯迅を繊細な筆致で追っていくのである。

先ず断髪時の魯迅の決意を物語る「自題小像」をとりあげ、大胆な新解釈を展開するが、特に転・結句の解釈は面白く注目し値する。

意を寒空に寄するも全察せざらん

我我が血を以って軒轅に薦げん

(紫禁城内の天子へ寒星に、私ははるかなおもいを寄せるのだが、君、光緒帝へ全は、たぶん理解されないであろう。よろしい、それならば私は私の血を、漢民族の始祖、黄帝へ軒轅に薦げまいらせよう。)

こうして著者は、「反逆の文学者としての魯迅の出発点を明示」する七絶と結論づける。

尚、この解釈の根拠は注⑩で詳述し、更にこの詩の成立時期につ

いては、本書巻末の付録「魯迅旧詩『自題小像』の成立」という極めて実証的な論文をあてている。

続いて、当時の革命的風潮に刺激されて書いた第一作品「中国地質略論」の分析（六三頁）もユニークであり感銘を受けた。

「魯迅は地質学を解説しながら、実は革命派の、民族解放路線に対する支持を表明していたのだ。」また「思想的にダーウィニズムが大きな作用をはたしていた。」「ユームアに満ちた、しかし非常に痛烈な諷刺を内包する逆進化の論理である。」と説く。更に、しかし「これは決して魯迅の独創ではない。」むしろ、郷容の『革命軍』が先行していると述べ、両者の用語と発想の一致点を解明してくれる。魯迅におぼれぬ冷静な眼力はさすがである。

三・四章は「悲しみと怒り」「屈辱と悲哀」の見出しで、魯迅と光復会、仙台行の意味、医専での屈辱に言及する。

彼自身は意気揚々と東京を離れたのでは、決してなかった。たとえ医学を修め得ても、それはかつて彼の夢想した「豪俠の士」となり得る性格のものではない。（七六頁）

魯迅の心は風雨にとざされた祖国と、それにつらなる東京を一時も離れたわけではない。むしろ祖国と同胞の現状を憂慮したために仙台へ単身脱出したという方がより真実に近いであろう。仙台行はあくまでも、魯迅自身の「夢」を再編成する意図で実現された。（七七頁）

と述べ、いよいよ「藤野先生」のノート事件や幻灯事件にふれる。

「中国は弱国である。だから中国人は当然、低能児である。平均点が六十点以上であるのは、自分の能力ではない。彼らが疑

いをもったのも怪しむに足りない。」

この淡々とした回想の中にあるものは、ただうめき声のみである。それは自らが加害者であることを自覚せぬ近代国家の国民には絶対に読みとり得ない陰湿な叫喚である。（七九頁）

と言い、続いて「清国留学生取締規則」に端を発した陳天華の自殺・「絶命書」にふれて言う。

……陳天華の悲痛な思いを、はたして幾人の日本人がいたみをもつて受けとめ得たであろうか。八一頁

ここには、私が冒頭に述べた著者の誠実さが激しく脈打っているのである。著者が少年時代、竹内にショックを受け、竹内に培われてきたものが息づいている。しかし、著者は本編では竹内に挑戦を試みてもいる。これは一つの新しい提言でもあるので、ここに記しておく。

在仙二年目の魯迅はすでに医学への情熱を燃やさなかった。この半年はまたしても脱出の準備期間として保留された。もし魯迅に「回心」を認めるならば、それこそこの時期である。魯迅自身の「新生」は、このとき胎動を始めていたのだ。その魂の飛翔の痕跡は、ひき続いての沈黙と、一九〇七年以降の饒舌が、すべてを明らかにしているところである。（八三頁）

こうして見ると、一九〇六年もお沈黙の継続である。ほくはこの沈黙を、仙台時代に芽ばえた、新しいモチーフの成熟期と推断する。（八五頁）

仙台へおもむいた前後の魯迅に、そうとう長期にわたる沈黙のあることをいうはずであった。しかもそれが外的な圧力によって強いられた沈黙ではなくて、何よりも彼自身の内的な必然性にも

とづいている点を、重くみなければならぬと考えている。口を開かないのではなくて、彼には口が開けなかった。……略……ニ―チュを耽読したのは、この時である。進化論と本格的にとりくんだのも、こうした沈黙のさ中であつたらう。観念的理想主義と科学的合理主義という一見似ても似つかぬ思想の結合を、期せずして魯迅はこの時点で試みていたのだ。一九〇七年以降の文筆活動の中に、それは爆発的に花を開き、実を結んだ。かつての「豪俠の士」に代る、有力な英雄の系譜が、ここに新たな装いのものと登場するのである。(八七頁)

さて、ボルテージの高い本論ではあるが、疑問とするとところがないでもない。例えば、

1、増田渉氏の記述にある「刺客命令」の発せられた時期について、「その時期を確定することは当事者がすべていなくなつた今日では、もはや永遠に不可能」(七一頁)と言いつつ、仮定の話として、「仙台就学以前であれば、魯迅の東京脱出と刺客任務の放棄には、もちろん何らかの因果関係が生ずるだろう。浙学会のテロを重視する方針からすれば、光復会成立以前にも、彼らが魯迅に「要人の暗殺」を命じた可能性がないとはいえない。テロは実際にあり得た。」(七〇頁)とこだわるのである。そこには東京脱出と結びつけたい著者がいるような錯覚におちいる。

ともかく、この「東京脱出と刺客任務の放棄」を結びつけた新島淳良説や尾崎秀樹説の成立根拠がないことは、すでに早く、細谷正子氏によって論証されている(丸山昇「魯迅」五一頁) わけであり、それをくつがえす新たな論拠がないままにふれられた意図がわからない。

2、関連して、著者が「刺客命令」を問題とした意図は、むしろこの方にあるのかも思えるが、「侮蔑に耐える生か、栄光に輝く死か、魯迅はギリギリの地点で前者を選択した。……略……長男としての責任感もあつたらうが、それだけが彼を支えたと見るのは、やはり皮相である。この時点で、魯迅はきっぱりと、實際行動からの離脱を決意しているのだ。」(七五頁)は、迫力がありすぎてとまどってしまう。留学中のどの時期であれそれほど言いきれものかどうか。離仙後にしても、かつての革命の仲間と三日あけずに談論しており、それと「侮蔑に耐える生」が結びつかないのである。

3、同じような疑問であるが、留学生仲間の言動に嫌悪すら感じていたこと、奴隸であることすら意識しない連中への怒りや悲しみを抱いていたことも事実であろう。しかし、「この魯迅の悲しみと怒りを抜きにして、彼が選んだ仙台行の意味を理解することは不可能だ。そしてこの悲しみと怒り――それが、東京にいた清國留学生と、魯迅との決定的な差違となった。」(七四頁)という「決定的な差違」が疑問だ。東京の留学生の中にも大いに怒り、悲しんだ者はいた。陳天華の怒りや悲しみは、魯迅とどれほどの差がある。その差が生じるのは、著者のいう仙台前後の「回心」を経たのちではなからうか。

「文学と英雄の系譜(下)」――留学時代後期――

離仙後「口を開かなかつた魯迅」が一九〇七年末より爆発的に文章活動を開始した。

著者は先ず「文学的出発の一大記念碑」である「摩羅詩力説」か

ら分析する。

パイロン、シェリー、プーシキン、ペターフィ等の悪魔派詩人に魅かれた理由、彼らと魯迅との「複雑な血縁関係」を説明する。その要旨紹介は避けるが、ともかく豊富な資料を縦横無尽に駆使、「豪侠の士」「精神界の戦士」「明哲の士」「一二の士」という革命の英雄像を描く経緯、言いかえれば、魯迅初期文学観を明らかにしてくれる。

ここで私が特に興味と共感を覚えさせられたのは、『小説神髓』と『摩羅詩力説』の小説観が「ほぼ相等しい」としながら、実は、それは教訓排除の論と文学の「無用の用」との共通性だけであって、究極的には全く相反するまでにその文学観がちがっていること、またそのよってきたる理由を説明したところ(九九頁)であった。ここから、私は坪内の小説改良はむしろ胡適と相等しいのではないかと思った。

尚、章太炎の魯迅への影響についても再認識させられた。

「新旧のはざままで」——教員時代——

教員生活第一歩の浙江两级師範学堂での「木瓜の役」や、紹興府学堂での断髮問題、学園紛争等、文字通り「新旧のはざままで」苦悶する魯迅を再現する。ここで興味をひかれたことは、魯迅の、学生や教員への対応の仕方であった。特に学園紛争時のそれを、許壽裳宛の手紙(すなわち、東京弘文学院学生時代の紛争を思いおこし、現在の学生たちの気持ちを斟酌している)で説明したところ。今一つは同じく許壽裳宛の手紙から、従来どの「魯迅年譜」にも記されていない、一九一一年五月ごろ、再訪、約半月滞在しているとの判断(二三六頁)であった。

「蹉跎から呐喊まで」——役人時代——

紹興光復後の魯迅や范愛農の積極的行動、それが革命派内部の墮落・無節操な行動に傷つき、南京へ脱出するも、ここもまさに「大ドブ」的状况であり、魯迅はいよいよ深い蹉跎をなめていく。そして長期の「暗黒」、しかし「魯迅の骨格が形成された時期」に入っていく。

1、この間の魯迅の精神史を何も書いていないはずの『魯迅日記』をひもとくことで、その秘められた心情を汲みとろうとする「寂寞の中で」の章には、著者のするどい、しかしやさしいまなざしが見える。

2、魯迅の沈黙と金石拓本の研究との相関関係についても「袁世凱ゲシュタボの追及を逃れるための安上りの道楽」とか「もともと絵画と同じように、小さい頃から愛好していた」「酔酒婦人に代る者」「古典研究のため」等々、消極・積極の一面に偏せず、それらをふまえた上で、その寂寞や失意と結びつけて理解すべきというのの妥当である。

3、紹興都督らの墮落を監督する新聞『越鐸日報』で、寂寞を忘れたかのように、毒棘を意味する「黄棘」を筆名として投稿、闘っている時、裏では同志の学生たちが「五百円の口どめ料」を何らの疑問もなく受けとっている。それを知った時の魯迅の当惑、魯迅の潔癖性を述べている点に全く同感である。この時、私はふつと中野重治を思い出した。中野が再三言い、書いていること、かつて小林多喜二を除いた物故作家の慰霊祭にかぎつけた腐臭、欺瞞性、あれである。一片の節操もなく、骨抜きにされていた作

家たちへの許せない中野の思いである。

三

第一部『魯迅の文学』

「屈原を葬る」——魯迅のリアリズムとロマンティシズム——
これは著者の古典文学への蘊蓄の深さをうかがわせる重厚な論文である。

まず、屈原文学の研究史的展望を紹介、続いて魯迅の屈原観を論述するが、論中、魯迅と胡適との屈原像の共通性を述べるようでありながら、実はその「無辺の間隙」を指摘していることには、教えられた。

それを要約すれば、両者は「人民詩人」、「愛国詩人」という既成の屈原像に対し、「お手伝いできない不平」つまり「悲嘆の文学」でしかないという認識において共通する。しかし、胡適は欧米にならっての中国の近代化のためには「屈原は有効性をもたない」という「実用性の観点」からこれを切り、魯迅は「悪魔派詩人の目」で裁断し、その反抗のなさに幻滅はするが、その「文采」は好んだ。だから騒詞を以って革命者を顕彰するという「一見あい矛盾する創作行為に出」たとする。

ここで一点の不満を言えば、『彷徨』の題辞に『離騷』を用いていることに、直接言及がないことだ。もちろん第一部で「隠遁の孤高に本来の姿をとらえようとした」(二二頁)とか「孤高に安住する、いやそうありたいという願望ないし夢が早年の魯迅にあった」(三四頁)それが『野草』につながっているといった説明があるし、第二部では『野草』と『彷徨』との創作時期は重なり合い「これは魯迅

が騒詞に自らの心情を託して、あてどもなくさすらっていた『彷徨』の時代である。」(三二頁)とふれてはいるが、ここでは、その「孤高」も「行義」も否定されたわけだから。

「魯迅と『白樺派』の作家たち」

本書中の圧巻である。著者はその日本文学への造詣を利器として、武者小路や有島との差違を執拗に追う。もちろん、資料、先行論文に充分目くばりしながら、豊かに実証していく。

本編には貴重な見解があまりにも多いのであるが、今、私なりにその幾つかを列挙してみよう。

1、「ある青年の夢」の翻訳理由について、作人の、「非戦論の代表」であるから、ではなく、魯迅の場合は「中国伝来の「痼疾」(持弊)を治療する処方箋として」(二九五頁)受け入れたにすぎないとの論断。

2、「武者小路の発想と相通するものがある」としながら「両者は資質的にははっきりと対極にある」となし、それは「一方は強者の高所から弱者の欠陥を、まるで無縁のものとして、それを鳥瞰し、他方はそうした強者を高みから引きずりおろす唯一の手段として、強者と同質の悪をまずみずからの身に見る。」(二〇三頁)

3、有島「小さき者へ」と「我々現在怎樣做父親」『随感録四九』とを比較して、「このふたりの文章は、まるで一枚の紙きれの裏と表との関係にある。魯迅が呼びかけ、有島が応えた。ちょうどそうした機能を、それぞれの作品が分けていた。」(二二〇頁)と述べながら、しかし、魯迅は有島の文章に「眷恋と悲哀」を「さりげなく指摘」しているとの見、続いて『壁下叢書』中に有島

の「宣言一つ」とその批判書である片上の「階級芸術の問題」を配置したところにも「ひかえめな有島批判」をみている。更に「墳」の後記」を引用することで、両者の「接続不能なほどの相異点」を「第四階級との接点」をつかめたか否かにあるとする。魯迅には、自分が旧陣営の出身者であればこそ、その弱点を剔抉し「敵の死命を制し」得るというしたたかないなおりの姿勢があった。有島はそこで思いこみ、魯迅はそこをつきぬけた。あるいはつきぬけざるを得なかった。そしてつきぬけることによつて接点を獲得した。(二二七頁)

4、有島はどちらかといえば、宗教的諦念に近い思いこみによつて、自己生得の位置を一步も踏み越えようとしなかったのに対して、魯迅の場合は、同じくおのれの立場を冷徹に見きわめ、厳しく自己規定しながらも、有島がついに掌握し得なかった「第四階級」との接点に交又する方途を見つけ出し、それをば覚醒した知識人の任務として自らに課することになった。(二二九頁) それが「無惨な死」と「死の直前まで論争」をくりひろげるといふ差違を招来したという。

さて、次にはどうしても納得できかねる一点を記さねばならぬ。魯迅が武者小路の戯曲に対して「もとより意見の同じでないところ」をもちながら、「純朴なヒューマニズムの積極面」を受けとめている例証として、「ある青年の夢」を引くのであるが、そのことは当然として、次の作品評価が納得できない。

これが侵略当事者たる「丁国」作家のせりふであることを想起

する必要がある。周作人が喜び、魯迅が感動したのもいわれのな
いことではない。この前年に、日本はいわゆる「対華二十一ヶ
条」条約を要求して、中国民衆を憤激させている。いわばそうし
た日本政府の中国侵略戦争に対するまっこうからの批判が、ここ
にはもりこまれていた。(一九七頁―一九八頁)

と言ひ、その論の補強として、本多秋五の「白樺派の文学」を引
用するわけだが、ここがまた疑問だ。

それはかつて本多秋五氏が「白樺派の文学」で武者小路実篤に
ついていみじくも形容したように、「華胃界」の「御曹子」と
しての「自由」でものを考えた」彼にして始めていい得た、ある
種の「放言」であつたらう。(一九八頁)

先ず、この後の疑問から述べれば、本多氏のここでの言は、著者の
評価とは相矛盾するものではなからうか。武者小路の「天才意識」や
「自己肯定意識」「救済者意識」という、ぎりぎりのところから発
せられたものいいでないことを、或る意味では肯定しながら、同時
に否定的な意味も含めて「放言」といつているのではないか。これ
は「ある青年の夢」が中国で翻訳されたのを機会に「新青年」
(第七卷三号)に寄せた武者小路自身の「与支那未知の友人」や、その
『訳者付記』(周作人)を読んでも、益々そう思われる。つまり、そ
こには自分自身が侵略国の一員であることの恥の意識は甚だ希薄で
ある。逆に「火つけ人」的発想で、中国民衆の覚醒を求めたもので
ある。ここにその一部を引いてみよう。

我老実的説：我想現今世界中最難解的国、要算是支那了。别的
独立国都覚醒了、正在做「人類的」事業：国民性的謎、也有一部
分解決了。但是支那的這個謎、還一点没有解決。日本也有還沒有

完全覚醒、比支那却已幾分覚醒過來了：謎也將要解決了。……

（尚、この武者の手紙に早速火をつけられて養元培と陳独秀が一文を「新青年」に寄せ
ていることを付記しておく）

さて武者小路の『ある青年の夢』については、確かに「丁国」の
恥です」とか、我々は当局者にだまされてはいけません、他国民に
無理難題をもちかけて、それを聞かなければ戦争するぞというに至
っては甚だよくないことです」等の、おやっと思わせりふがある。
しかし、著者のいう「二十一ヶ条」条約に対するまっこうからの批
判とまでは私には読めない。私は紅野敏郎氏の「八百人の死刑をめ
ぐって」（近代日本文学における中国像）中の『ある青年の夢』の次の
評価に賛成である。

この作品は抽象的な発言がきわめて多く、しかも、中国に対する
日本の姿勢の点検、という具体的な作業などはほとんどなされて
いない。「国家のあまりにも強いエゴイズム」は原則として全面
否定する。この発言はまことに堂々としている。しかし強圧的に
取り結んだ対華二十一ヶ条条約という具体的問題については、まっ
たくふれられていない。ここに一つの重要な問題がひそんでい
る。

武者小路は台湾の八百人の死刑には、人道上の問題だ。どうにかし
てやって彼等を死の恐怖から助けることはできないだろうか。でき
ないというのは日本人の恥じではないだろうか。」とまで言えた。し
かし、同年の「対華二十一ヶ条」条約には口をつぐんでいるのだ。

吉田熙生氏が「漱石、満韓ところどころ」でいう「大正期は対華
二十一ヶ条要求をはじめ、日本の中国進出の意図が露骨になるにもか

かわらず、知識人がひたすら自己の内面に閉じこもった時代」

（近代日本文学における中国像）での武者小路の発言ということをお
きながらも、やはり著者のこの評価には納得できなかった。

今一つ、疑問ではないが、著者が有島の自己省察のきびしさによ
たれながらも「どちらかといえば宗教的諦念に近い思いこみによ
て、自己生得の位置を一步も踏み越えようとしなかった」（三三八頁
）と言いきるところに、それが魯迅との比較で言われたことは言
え、いささかきびしすぎる評価ではないかと気にかかる。有島ほど
誠実に自己生得の位置に殉じて、おのれをこえていく歴史を信じて
いた作家はいなかったのではないかと、思うからである。

尚、すでに気づかれているように、「革命時代の文学」の講演年月
が二一七頁と二四四頁で二様のミスである。

「火を盗む者」——魯迅とマルクス主義文学——

魯迅のマルクス主義受容と革命文学論争の考察であるが、私は先
ず、「火を盗む」を以って論文の題名となし、魯迅は「他の国」か
ら火を盗んだ。けれどもそれはプロメテウスがそれを人間の手に渡
したようにはなく、何よりもその「本意は自分の肉を煮ることに
あった」を以って論文の結びとした点に、著者の魯迅理解の深さ
と、「文采」をも識らされる思いであった。

このことばは「硬訳」と「文学の階級性」（一九三〇）で使わ
れているが、魯迅のマルクス主義や外来思想受容の態度を象徴的に
表わすことばだと思う。著者はそのところを、「ある特定の見解
をまるごと取りこんで、それをそっくり自分のより所とするのでな
く、たとえ立場の異なる理論でも、そこから自分に有効な成分だけ

をとり出し、それを自らの消化器官でゆっくりそしゃくしているか
のようだ。」(二六六頁) とも言いかえている。

本論のテーマについては、周知の如く、丸山昇、伊藤虎丸、松山
久雄氏等のすぐれた論考があるが、それらに充分伍するものであ
った。要旨紹介は避けて、注目させられた点と要望を書きとめてお
う。

1、随感録五十九「聖武」(二三三頁)の誤訳の指摘(補注(一)三五三頁)は、

著者の精確緻密さがうかがわれるもの。竹内氏も「魯迅文集」第
三巻では、著者と同様に改訳。(岩波版「魯迅選集」)のこの部分の担当は増

田氏序で「大魯迅全集」(改訂社)は鹿地氏訳で、誤訳である。

2、「革命時代の文学」(二九七・四) について、補注(二)三五三頁

で、丸山氏の「魯迅と革命文学」に一定の評価を与えながらも
『而已集』収録の時点で書きかえられたという仮説には異論を出
されている。恐らく、魯迅研究者の齊しく期待するところであ
り、著者の詳細な論考が待たれる。

3、2に関連して、革命的情熱に溢れ、北伐最先鋒の誇りをもって
訓練に励んでいた学生や教官たちはどんな気持ちで魯迅の講演を聞
いたのであるか。その中には国民党員も共産党員も跨党員もい
たわけだが、「広東は依然として十年前の広東、苦しみも不平も
ない、あるいは政府公認のデモだけ、圧迫に反抗するのではなく、
上からの命令による革命をしている」だけ、と志気を鼓舞するよ
り水をさすような、或いは危険な発言とも思える講演を、どう受
けとめたのか、それを示す資料はないのだろうか。次の論文では
ぜひふれてほしい。

4、マルクス主義思想の受容について、文献購入、学習、翻訳、論

争と多方面から論及されたわけだから、それを経た魯迅が兩三年
後には、小林多喜二の死に弔電、長征勝利にも打電、或いは蕭軍
夫妻宛の手紙には中野重治の転向にふれ、兩國官憲の弾圧や西國
左翼作家の闘いに注目していること等への言及がないのを惜しい
と思う。

四

第Ⅰ部「魯迅の世界」

「戦後日本の魯迅論」は明晰・簡潔な紹介、解説である。魯迅研
究の専門非専門を問わず大いに有用であろう。ただ一部に言葉不足
の解説があるように見受けられる。例えば太宰の「惜別」の評価や丸山
氏の「魯迅」評価にそれを感じた。

太宰愛好者は「この長編に目を通さない方が賢明」というのは領
けない。竹内美氏「日本人にとっての中国像」ほか、「惜別」を見
なおす発言もあり、評価がわかれていることを言うべきと思う。

「魯迅と郭沫若」——その九州大学との関係——

魯迅を九大に斡旋しようとして実らず、「あとあとまで残念」が
つておられた増田氏とそれを紹介する著者の、同じ想いが重なって
くる。その文章の根底になんともいえない美しいものが流れている好
エッセイである。

著者が「たとえ古典をやるにしても現実的な視点がなければ、有
用性のないあそびにすぎない」という増田氏のことばを肝に銘じて
いること、本書全編にそれが生かされていることをつくづく思う。

同じく、魯迅と郭沫若が「常に論戦の一方の旗頭として、一見対

立しながらも、それでいていつも共通の基盤から剝離することがなかったのは、それは八先進国∨日本との緊張関係が、その間に触媒として作用していたからである。」には針一本異論の余地はない。

「創作の筆をたつとき——境界としての「三・一八」事件——
「三・一八」事件の衝撃が、魯迅の文筆活動に一線を画した。暗夜に人知れず葬りさられていった多くの若い文学者や青年たちへの償いが創作と訣別させ、雑文・雑感の方法に変えさせたとする。それは「外部からの事情が強いた」でもなく、「真実書けなかった」でもない。「現実との闘いの中で有効」な方法を自らが選択したのだと言ひ、次のことばでしめくくっている。

けれども彼は筆の力が「火と剣」の前ではいかにも「無力」であることを誰よりもよく自覚していた。ただ彼はそれ以外に戦う手だてはないと心定めていた。……その文学的営為の目的はひたすらに中国の暗い現実といかに切り結ぶかという一点に集約されていた。(三〇〇頁)

「魯迅の世界」——「野草」の実存主義——

本論は比較文学の手法で「野草」の精神を追及する。すなわち、ツルゲーネフ、ペテーフイ、漱石の作品の中から、「野草」と題材の共通するものを選び出し、比較する。

しかし、著者の論述があまりに簡潔なためか、いささか物足りなさを感じた。各章の結論には、どれも異論はないが、これまでの著者の精悍さ、執拗さが消えているようだ。もちろん、これは私の「野草」理解の浅さ故であろう。浅いままに一点の疑問をあげて書

評を終りたい。

著者はペテーフイ詩と比較して次のようにいう。

それぞれに対応する魯迅の作品はまったく異質である。「墓碑銘」のあの不気味さはペテーフイの詩中には見かけられないし、「投槍を挙げ」てただ一人「無物の陣」に進みいる「このよう

戦士」のあの「蒙昧」は、「民」にはない。(三〇七頁—三〇八頁)

この後半がわからない。著者は「このような戦士」の行動を「蒙昧」と言い、そういう戦士は、ペテーフイ詩の「民」にはないと言っていると読むが、また逆に、ペテーフイの「民」には「蒙昧」な民や戦士はいないが、「このような戦士」にはいると言っていると考へてもよさそうだ。ともかく、どう読んでも著者は「蒙昧」を肯定的に読んでいると思うが、魯迅は「このような戦士」やその行動を「蒙昧」とは言っていないと思う。

このような戦士はいないものか——アフリカの原住民のように蒙昧しかも雪白のモーゼル銃を背負っている、というのでもなく、中国の緑営兵のように無気力でしかも大型拳銃をぶらさげている、というのでもない。牛皮と魔鉄でできた甲冑にかれは庇護を求めない。かれは自分があるだけ、武器は蛮人のつかう投げ槍だけだ。(「魯迅文集」第二巻竹内訳)

つまりここでは、蒙昧な原住民が近代的なモーゼル銃を背負い、無気力な緑営兵が大型拳銃をぶらさげているのであって、このような戦士は自分があるだけ、武器は蛮人のつかう投げ槍だけなのである。「このような戦士」には「蒙昧」な戦士も民も登場せず、逆に世故たけた慈善家・学者・文士……が美しい宣伝文句を飾り立てて登場するのである。

以上で「魯迅の世界」全編について、甚だ型破りの書評を終えるわけだが、冒頭に述べた強い印象と今一つの実感は「刈入れは他人にまかせて、自分は種子蒔、草とり、害虫との戦いに全生涯をかけた」(中野重治「魯迅について」)魯迅が一貫して明らかにしていることである。しかし、本書のすぐれた価値を、私の読解力の浅さ、魯迅理解の浅薄さから存分に紹介できず、そののみか、とんでもない誤読や著者の意図するところが汲みとれないままであろう。書評は「柄ではなかった」「著者や読者に申訳けない」という気持がぬぐえないままであるが、今となっては、かなわぬながら「大鬼」をむこうにまわして、「孔だらけの皮膚をさらしてゆくほかは」(中野重治「歌のわかれ」)あるまい。

(大修館書店刊 一九七七年五月 三六四頁)

△一九七八・二・十五▽